



特集「国立大学法人化の理想と現実③研究・社会貢献」

● Twin Triplets:

陽：期待・連携・貢献

陰：多忙・疲労・閉塞感

Three is the magical number for themes,  
while Seven is for cognitive chunks.

## 行動する人文学—「文明対話学」の提唱

青木三郎

人文社会科学研究科教授

人文学からの社会貢献をテーマに原稿を依頼された。人文学、つまり伝統的な哲学、史学、文学といった学問が世の中の役に立つ学問、つまり実学として社会に貢献できる学問になるだろうか？サルトルの有名な言葉を思い出そう。「飢えて死ぬ子供を前にしては文学は無力である」。本居宣長も言う。「物語は、儒仏などの、したたかなる道のやうに、まよひをはなれて、さとりに入べきのりにもあらず。又国をも家をも身をも、をさむべきをしへにもあらず。」（『源氏物語玉の小櫛』）。文学は社会を改良するためにあるわけではないのである。これは人文学者の異口同音の考えであると思われる。

しかし人文学が社会にとって有用ではなく、社会貢献と関係ないということを堂々と主張し、論陣を張っているだけではすまされない現状もある。今や、大学の研究者の評価は、いかに競争的外部資金を獲得す

るか、いかに技術革新の拠点となるか、いかに国際的教育研究拠点となりうるか、いかに博士号の数を増やすか、いかに学術論文への引用回数を増やすか、学会賞を増やすか、等々、次から次へと外的要求が激化してくる。評価が低ければ、あそこは何をやっているんだ、ということで人員削減の対象になっても文句は言えないし、そうなれば、無用な学問の教育も研究も出来なくなってしまう。無用な学問に教員の数を増やしてくださいとも言いづらい。

そのような大学運営上の状況もあるが、それよりも、現代は、地球温暖化、人口爆発と少子化、食料危機と飽食による現代病、砂漠化、化学物質汚染といった地球規模の問題とともに、文化と価値観の多極化、多様化が急激に進み、留まるところを知らない状況にあって、民族間の紛争・対立の背景をなす言語、文化、社会、政治、歴史観

等々をめぐる根強い葛藤、摩擦、暴力など、人文学の立場からも、何らかの形で取り組まなければならない地球規模の課題が増大しつつある。人文学は、人類相互の誤解、誤読、対立、偏見等の解消に寄与することが可能ならずである。どのような寄与が可能か、そのプログラムを考えなければならない責任がある。一人でできることは限られているから、世界の人文学者が協働できる体制づくり、そしてそのネットワークを動かす人材育成が必要となる。このように考えると、大学の人文学研究も、自分の研究室で知識を追究するだけでは社会的責任を果たせなくなってきたことは事実である。国際社会の課題解決に資する発信型・提言型の人文学とは何か、何ができるか、それを志向してみたい。そこで、人文社会科学研究科の先生方と図書館情報メディア研究科の先生方の協力と助言を得て、「文明対話学」を構想してみた。以下は、その構想について述べたいと思う。

まず、「文明対話学」構想は、人間の根源を支え、対話の基盤となる<言語>を中心に据え、本学の国際連携構想を前提に、5つの「東西交流言語文化圏」(下記)を対象とし、「行動の学」としての「文明対話学」の創出をめざす。<言語>から出発する理由は次のとおり。

①<言語>は人類(ヒト)に公平に備わっている能力であり、特定の人種、地域社会

等を超えた普遍性をもつ。同時に歴史的、地域的に多種多様であり、固有の言語文化社会を形成している。言語文化研究は、この<言語>の普遍性・一般性を公平に扱う視座を鍛え、かつ各言語文化社会の固有性・独自性を尊重する態度を養うことができる。

②<言語>は<聞く・読む・話す・書く>という独自の行為により、他者(異文化)との対話的交流を行う。わが国は外国の知識を翻訳という<読む>行為を通じて蓄積し、<話す・書く>という行為を通じ、思想と感性を鍛え文化を発信してきた。<話す・書く>は自己の思想と感性を鍛え、他者と価値観を共有するために重要である。このように<言語行為>を通じた対話的交流の技術を高め、文明間の対話的交流を促すことにより、地球規模の諸問題を共有し、共同で問題解決に取り組むことが可能となる。

以上の認識から出発して、以下3点を特に強調したい。①文明圏を人類にとって普遍かつ公平な<言語>を基軸にして把握し、言語文化圏として再定義する。それにより政治経済圏や宗教圏とは異なる世界を現出させ、言語に込められた様々なコードを読みとり、対話促進ができるような基盤を構築する。②「文明対話学」で対象とする東西交流言語文化圏とは、本学の国際連携の重点拠点が位置する北緯30度から50度の

間を東西に繋ぐ東アジア、中央アジア、中東、北アフリカ・地中海、ヨーロッパであり、複数の言語文化圏と本学の研究者間の持続的な対話と交流に基づいた文明対話のベルトを形成する。③異なる思想、文化、言語等を相互に尊重し、知見を交流することにより自己を発見し、変革させていく行為として「対話」を捉え、従来の文学や言語学の枠を超えた高度な対話技法を開発する。④とくに、本学の特色である日本文化・日本語教育・日本文化教育の国際的展開を図る観点から、日本語・日本文化に関する深い知識を基盤として、他の言語や専門的知識を駆使した対話技法を身につけた若手研究者の育成を図る。

本構想における「文明対話のベルト」地帯は、相互に歴史的に深い関わりをもつく多言語文化社会であり、その特徴は言語文化状況の複雑性と価値観の多様性にある。本拠点はわが国が「文明対話ベルト」において学術的貢献を果たすために、①諸言語文化圏の基礎的な調査研究（地域社会の特性分析、言語的、文化的特性の記述、日本語学習の現状調査等）を踏まえて、②諸言語文化圏が抱える諸問題を明確にし、③本拠点から可能な提言（政策提言、教育支援、共同事業提案等）を考察し、④国際連携を形成しつつ、国際対話フォーラムを定期的に開催して討議する。

それにより、例えば、東アジアにおける日・中・韓の日本語教育の共同開発、中央アジアにおける国家語の建設と日本の近代「国語」建設の経験との比較検討、北アフリカ（チュニジア、アルジェリア、モロッコ等）におけるアジア理解のための日・中・韓共同対話（映画、文学、演劇等）、ヨーロッパにおける「ヨーロッパ共通言語参照枠」の構築と日本語の国際的標準化、さらには諸言語文化圏を横断し、連歌や俳句などの文学を通じた感性の交流と共有化などの課題に取り組む。

平成17年2月における国際シンポジウム「対話する言語学」は、その成功例として速報つくば（2007年05号）に詳細が報告されているので参照されたい。

さらに、知的共有基盤の整備という観点から、図書館情報メディア研究科の協力を得て、「バーチャル言語文化ミュージアム」を構築し、諸言語文化圏の言語文化情報を共有し、活用していく。知的共有基盤として、①地域文化のバーチャル体験型シター、②言語資源コーパス、③学術資源情報の蓄積、という3事業を国際協力によって展開し、文明対話ベルトにおける情報共有と発信の拠点を構築する。

「文明対話学」構想は、本学の国際連携構想（「文明対話ベルト」地帯における国際拠点形成や交流協定による知のネットワーク

構築)、人文社会科学研究科に設置予定の「国際比較日本研究センター」、図書館情報メディア研究科の「知的コミュニティ基盤研究センター」、全学センターとなる「北アフリカ研究センター」等との有機的な連動・連携を通して、推進されれば相当にダイナミックな研究体制、研究活動になると考える。さらにこの計画で得られた知見と経験を中等教育、学群教育に還元し、長期的な展望に立つて多文化・多言語理解を浸透させていく。具体的には附属高校(大塚、駒場、坂戸)に「多言語・多文化体験プログラム」を提案し、文明対話学の授業の一環として、大学院生の実習を実施するプログラムを目下検討中である。学部(学群)レベルでは、全学向けの総合科目「文明対話学への招待」などを将来的に開講できるように提案したい。さらに本計画を研究科全体の取り組みと位置づけ、文明対話ベルト上に「文明対話学」の普及を図る国際ネットワークを構築する。

これらは、ちょっと見には夢物語のようかもしれないが、本学の人文科学研究のポテンシャルを活性化すれば、かなりユニークなプロジェクトになるにちがいない。夢物語かもしれないが、語学力、対話力、行動力を併せ持つ若手研究者育成のために、語学力(3カ国語の運用能力)を鍛える短期

語学留学を含めた語学カリキュラム、目的に合わせた現地調査(フィールドワーク)、国際研究発表(事前準備と事後報告)、国際インターンシップ(日本語教育実習など)、バーチャルミュージアムのコンテンツ制作を必修選択とするカリキュラムが構想できるだろう。それにより、地域社会の歴史、社会・経済状況、問題点を熟知し、言語を通じて住民とコミュニケーションを図り、同時に、的確に日本を説明できる専門家の育成が期待できる。また知的共有基盤としての「バーチャル言語文化ミュージアム」を立ち上げることから、言語資源コーパスを利用した専門用語辞書や文法教科書など言語教育支援が期待できる。

また、「文明対話ベルト」上で、交流協定校と留学生の人的ネットワークを最大限に生かし、「国際文明対話学会」設立の準備を整える。最終的に政治、外交、経済、軍事を超えた人文科学研究を基盤とする「知」の交流のチャンネルが確保され、平和と対話のための人文学へと波及していこう。

これを、夢物語だよと一笑するか、実現に向かって行動しようと思うか… 私は後者の立場である。

(あおき さぶろう/言語学)